<table>
<tr><td>授業科目名</td><td>現代アート論</td><td rowspan="5">担当教員</td><td rowspan="5">熊倉　敬聡
小林　瑠音</td></tr>
<tr><td>必修の区分</td><td>選択</td></tr>
<tr><td>単位数</td><td>２単位</td></tr>
<tr><td>授業の方法</td><td>講義</td></tr>
<tr><td>開講年次</td><td>３年第３クォーター</td></tr>
<tr><td>講義内容</td><td colspan="3">「現代アート」とは、奇妙な言葉である。それは、Contemporary Art が意味するものと同じものを意味するのか。そもそも「アート」は何を指すのか。「美術」か「芸術」か「Art」か。本授業「現代アート論」の前半ではまず、それが前提とする「現代アート」という概念ならざる概念を改めて問い直しながら、それが、ある美術批評家の言う「日本という悪い場所」においてどのように形成されてきたかを、担当者の実体験も交えながら追跡する。そして、「現代アート」の“あいまいさ”が、やはり“あいまいな”批評ならざる批評によって形作られた、その所以を詳らかにする。
後半では、1990 年代以降注目を集めてきた「ソーシャリー・エンゲージド・アート」（社会関与型の芸術）をとりあげ、芸術が美術館やギャラリーを飛び出し、地域コミュニティに直接介入しながら社会的課題にアプローチする近年の動向について概観する。その中でも特に、日本において全国的な展開をみせている「アート・プロジェクト」の可能性と課題を、海外の事例と比較しながら論じていく。また、それらアート・プロジェクトを含め、日本の現代アートを取り巻く社会・政治・文化的現状を、「表現の自由」という切り口から考察する。</td></tr>
<tr><td>到達目標</td><td colspan="3">・学生は、「現代アート」の歴史的経緯を理解するとともに、それが（特に日本において）孕む可能性と問題点について自ら考察するきっかけをうることができる。
・学生が将来アート・マネージャーなどとして、アートの現場に関わる時に必要とされる社会・政治・文化的問題意識を育むことができる。</td></tr>
<tr><td>授業計画</td><td colspan="3">１．　「現代アート」という奇妙な言葉
２．　Contemporary Art とは？
３．欧米のキュレーターによる日本の Contemporary Art の発見⑴
４．欧米のキュレーターによる日本の Contemporary Art の発見⑵
５．「現代アート」と、「日本」という「悪い場所」
６．「現代アート」と批評ならざる批評
７．「ソーシャリー・エンゲージド・アート」（社会関与型の芸術）の登場
８.アート・プロジェクト（１）：日本における歴史的変遷と特徴
９.アート・プロジェクト（２）：海外の事例　（ミュンスター彫刻プロジェクト、シャンブル・ダミ、ドクメンタ）
１０.アート・プロジェクト（３）：アンブレラ・プロジェクト
１１.アート・プロジェクト（４）：課題（批評の不在、やりがい搾取、道具主義的文化政策）
１２.表現の自由：芸術と猥褻、美術館と規制</td></tr>
<tr><td>事前･事後学習</td><td colspan="3">次の講義の前に、配布したプリントや参考資料を用いて前回の授業内容を復習すること。</td></tr>
</table>

テキスト	適宜配布する。
参考文献	適宜紹介する。
成績評価の 基 準	出席および授業内課題（40%）、中間レポート（30%）と最終レポート（30%）により評価する。
履修上の注意 履修要件	特になし
実践的教育	該当しない。
備考欄	定員 50 名を超える場合は抽選とする。